

夜空に舞い踊る光と音

第19回米代川花火大会



県内では最も早い時期に開催される恒例の「第19回米代川花火大会」が7月10日、米代川河川公園を会場に開催され、約2万人の見物客が光と音のショーに酔いしれました。主催は市観光協会、商工会、北秋田市などで作る実行委員会。この日は、前日からの雨で開催が心配されたものの、昼頃には雨が上がり、会場には明るいうちから家族連れなどが続々と訪れ、観覧席となった河川公園のグラウンドや堤防の周囲も開会セレモニーの始まった午後7時過ぎには見物客で埋まりました。

午後7時30分開始号砲が鳴り、まだ日没後の明るさがうっすらと残る中、色とりどりの連発花火が夜空を焦がすスターマインで口火が切られ、4号から10号の割物花火、華やかなスターマインなどが次々と打ち上げられ、漆黒の夜空を華やかに彩りました。会場を沸かせたのが大型花火の「一尺玉」。上空300メートルほどで半径150メートルもの大輪を咲かせると大きなどよめきが起きました。このほか、ハートの形や笑顔の形に開く花火なども見物客を楽しませました。

フィナーレは「米代川にそそぐ光と炎のロマン」と題したナイヤガラ付の超特大スターマイン。会場全体を明るく浮かびあがらせるほどの色とりどりの連射花火がダイナミックに夜空を焦がし、会場からは拍手と歓声が沸き起こっていました。



▲次々と夜空に打上げられる花火



▲高野尻万灯火会の工夫を凝らした仕掛万灯火



▲会場には露店も出店し多くの方が観覧

大地に響く大太鼓の音——五穀豊穡を祈願

7月14・15日 八幡宮綴子神社例大祭

「綴子大太鼓本祭り」として知られている八幡宮綴子神社（武内尊英宮司）の例大祭が7月14日（宵宮）、15日の2日間にわたり行われ、直径3・8メートルの大太鼓を始め、獅子踊りなど郷土芸能を奉納しました。

例大祭は今から約700年前の弘長2年（西暦1262年）頃、農業用水の不足に悩んでいた当時の綴子村で、雨乞いと豊作祈願の神事として始まったと伝えられ、奉納行事は、上町と下町が一年交替で行い今年の上町が当番町で行われました。取り仕切り役の露払い太夫と「ヤツパリ」といわれる棒術の使い手を先頭に団旗、陣旗、豊年旗、槍や鍬箱を持った奴、袴に陣笠姿の侍など100人あまりの出陣行列が、3張りの大太鼓を打ち鳴らしながら綴子神社に向かい、地元の人たちや観光客が見守る境内で奉納行事が行われ、見物客から大きな拍手が送られていました。

また、神社境内で作占い「湯立ての神事」が行われ、武内宮司によると今年の作況は「平年作型。水不足の心配はないが、天候不順で水が多い可能性もある」と占いの結果を説明しました。



轟音を響かせ集落内を行進



▲露払い太夫を先頭に大名行列



▲棒術の使い手「ヤツパリ」



▲大人に負けじと奴踊り（子供会）



▲躍動感豊かな一人立三匹獅子踊り



▲立つ湯のしぶきで作占い